

『キャパの十字架』を読んで

平成 25 年 6 月 3 日

「崩れ落ちる兵士」の写真については NHK スペシャル「運命の一枚～“戦場”写真 最大の謎に挑む～」も見ていなかったもので、初めて知ることになった。この写真が 1936 年 9 月 23 日に VU に掲載されたときの題名は Loyalist Militiaman at the Moment of Death, Cerro Muriano, September 5, 1936 というものであり、1937 年 7 月 12 日号の LIFE に掲載されたときのタイトルは「DEATH IN SPAIN : THE CIVIL WAR HAS TAKEN 500,000 LIVES IN ONE YEAR」であり、小さな活字で「ROBERT CAPA'S CAMERA CATCHES A SPANISH SOLDIER THE INSTANT HE IS DROPPED BY A BULLET THROUGH THE HEAD」とあった。

第一に、今この写真を冷静に見てみると、タイトルをそのまま信じることに躊躇せざるを得ないのではないかと。少なくとも直ちに納得することはないと思う。一つの理由として、倒れる兵士の頭に弾丸が当たったような形跡は全く見られないことがあげられるであろう。

第二に、沢木が何度もスペインを訪問して、詳細に場所や状況を再現しようとした努力は素晴らしいの一言に尽きる。これだけ想像力も働かせて、謎に迫る態度は敬意に値する。

第三に、それにもかかわらず、彼の論理が十分に証明されたかという点と十分といえないのではないかと。どのような反論にも応えることができるほどの証拠があるとはいえない。自然科学の理論とは違って、一部の隙もなく証明することは難しい。それは社会科学においては主観的な判断を避けがたいからでもある。

第四に、当初、「崩れ落ちる兵士」が社会に広まったのには、スペイン内戦について共和国軍の勝利を願う国際世論や期待があって、この写真がその目的に適合するために、それに疑問をさしはさむことを敬遠する雰囲気があり、抵抗なく受け入れたのであろう。写真や報道は世論を誘導することができ、真実ではない情報に容易に左右されることがあることを示している。イラク戦争時のバグダッドでフセイン像を倒したときのテレビ報道で沸き返る市民がいる少し外側には冷めた目をしたイラク人がいたことはよく知れている。